

# 山梨県における劇症型溶血性レンサ球菌感染症の 発生状況について（2024 年）

山上 隆也

Streptococcal Toxic Shock Syndrome in Yamanashi Prefecture

Takaya YAMAGAMI

キーワード：劇症型溶血性レンサ球菌感染症、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、感染症発生動向調査

劇症型溶血性レンサ球菌感染症（STSS：streptococcal toxic shock syndrome）は、溶血性レンサ球菌の毒素産生株が血液、脳脊髄液など通常無菌的な部位に感染することで突発的に発症し、敗血症、多臓器障害などを引き起こす重症感染症である。感染症法に基づく感染症発生動向調査において、全数把握の5類感染症に定められており、診断した医師は7日以内に保健所に届出ることが規定されている。

2024年に全国で報告されたSTSSの患者報告数は、1999年に統計を取り始めて以降最多となり<sup>1)</sup>、山梨県でもA群溶血性レンサ球菌（GAS：group A *Streptococcus*, *Streptococcus pyogenes*）による重症感染症の増加がみられた<sup>2)</sup>。そこで今回、2024年に山梨県内で発生届出のあったSTSS症例について集計、解析したので報告する。

## 対象と方法

感染症法に基づき届出のあったSTSS症例で、診断日が2024年1月から12月のものを対象とした。発生届記載事項（性別、年齢、臨床症状、検査診断方法、原因菌）を感染症発生動向調査システムから集計し、解析した。

原因菌がGASである症例では、厚生労働省通知<sup>3)</sup>に基づき、医療機関等から分離菌株を収集して菌株解析を行った。菌株解析は溶血性レンサ球菌レファレンスセンター（国立感染症研究所細菌第一部）で行った。

## 成績とまとめ

### 1 年次別患者報告数の推移

山梨県における STSS 患者報告数は 16 例であり、前年（3 例）から 5 倍以上増加した。全国と同様、最近 5 年間で最も多い報告数であり、増加傾向で推移していることが示唆された（図 1）。

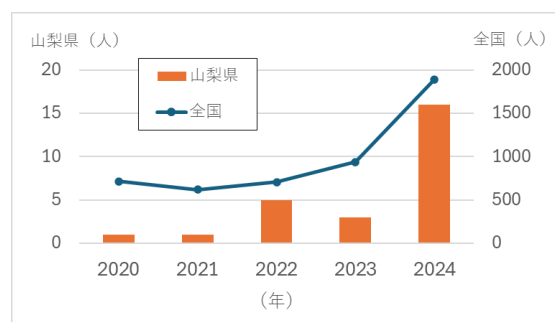


図 1 年次別報告数 (2020～24 年)

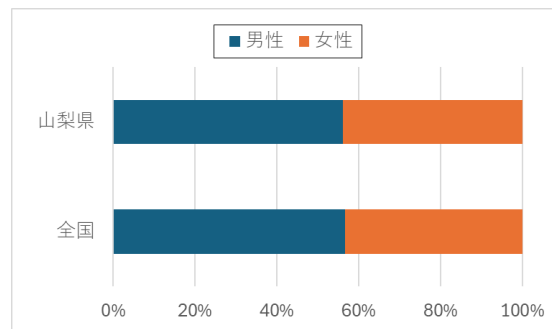


図 2 性別患者報告数

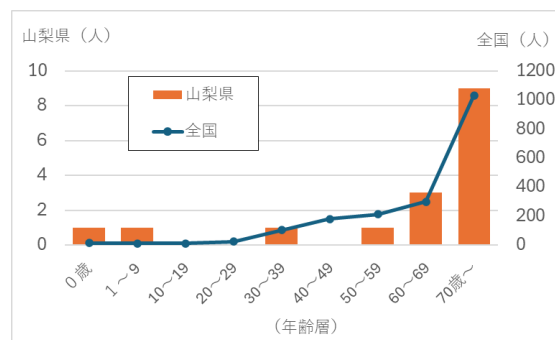


図 3 年齢層別患者報告数

2 性別・年齢層別患者報告数

患者の性別は、男性（山梨県 56.3%、全国 56.6%）が若干、多い傾向がみられた（図2）。年齢層別では、70歳以上（山梨県 56.3%、全国 54.6%）の年齢層が最も多かった（図3）。いずれも、山梨県、全国ともに同様の傾向であった。

3 臨床症状

届出基準では、ショック症状に加えて、肝不全、腎不全、急性呼吸窮迫症候群、血液凝固異常、軟部組織炎（壊死性筋膜炎を含む）、全身性紅斑性発疹、痙攣・意識消失などの中枢神経症状のうち2つ以上を伴うこととされている。

ショック症状以外の臨床症状では、腎不全（10例）、軟部組織炎（9例）が多く、半数以上で認められた（図4）。

4 検査材料・分離菌株

届出基準では、血液、髄液、胸水、腹水など通常無菌的な部位、生検組織、手術創、壊死軟部組織等からの分離・同定による病原体の検出が必須である。菌分離材料（重複あり）としては、血液（11例）が最も多く、次いで壊死軟部組織（5例）、胸水（2例）、その他（2例）であった。

分離された溶血性レンサ球菌の Lancefield 分類は、A 群（11例）が最も多く、次いでG群（3例）、B群（2例）であった。このうち、菌株の得られた GAS 4 株の菌株解析結果を表1に示した。2010 年代に英国で流行した病原性および伝播性が高いとされる M1<sub>UK</sub> 系統株<sup>4)</sup>が1株確認された（表1）。

5 A群溶血性レンサ球菌咽頭炎との関連

STSS の主要な原因菌である GAS は、A 群溶血性レンサ球菌（GAS）咽頭炎（小児科定点把握5類感染症）の原因菌でもあり、STSS 患者数の増加と GAS 咽頭炎流行との関連性が指摘されている<sup>2)</sup>。

そこで、山梨県における STSS の発生時期と GAS 咽頭炎の週別患者報告数の推移とを比較した結果、GAS による STSS の発生時期は GAS 咽頭炎の多い時期と概ね一致した（図5）。

両者の関連性をより明らかにするためには、GAS 咽頭炎

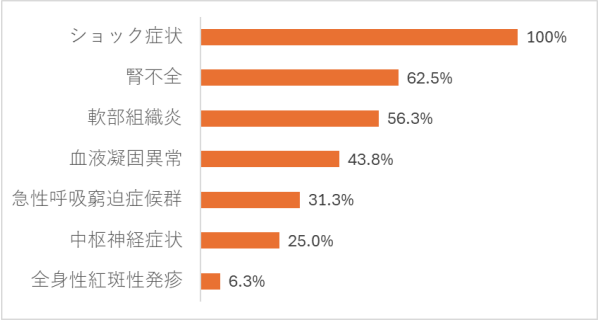


図4 臨床症状

表1 菌株解析結果

菌株	T血清型	emm 遺伝子型	M1 lineage	発赤毒素遺伝子			
				speA	speB	speC	speF
A	T12	emm12		-	+	+	+
B	T1	emm1	M1UK	+	+	+	+
C	T12	emm12		-	+	-	+
D	型別不能	emm76		-	+	-	+

+ : 陽性    - : 陰性

患者からの分離株を含め、継続的な菌株解析データの蓄積が必要と思われる。

参考文献

1) 厚生労働省:「劇症型溶血性レンサ球菌感染症 (STSS)」  
[[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000137555\\_00003.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000137555_00003.html)] (最終検索日: 2025 年 9 月 1 日)

2) 藤井 充ら: 山梨県における A 群溶血性レンサ球菌感染症入院例に関する実地疫学調査, 病原微生物検出情報月報, 46, 23-24(2025)

3) 厚生労働省感染症対策課:「劇症型溶血性レンサ球菌感染症の分離株の解析について」(令和 6 年 1 月 17 日付、感感発 0117 第 5 号)

4) Lynskey NN, et al.: Emergence of dominant toxigenic M1T1 Streptococcus pyogenes clone during increased scarlet fever activity in England: a population-based molecular epidemiological study, Lancet Infect Dis., 19, 1209-1218(2019).

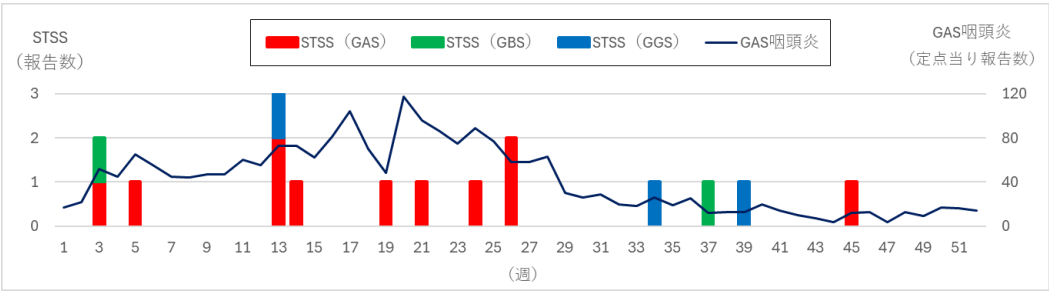


図5 STSS, GAS 咽頭炎の週別発生状況